

佳作

赤いアドバルーン

高柴 三聞

ここ数年、やたらと空気が重たい
その上、変に淀んでいて
まるで光の届かない海底の
奥底の方で水圧に抗しながら
生きているようなありさまである

思わず、うんざりするような

大音量でテレビやラジオから

音だけ大きな放送をやっている

どうも言葉としてではなく

鳥獣の声としてしか耳には届かない

味気ない毎日にととうとう

口の中も乾いてぱさぱさになって

思わずつばを飲み込んでみるも

カサリと喉の奥で音を立てる始末

潤いが足りないのだ

嗚呼、閉塞感に押しつぶされたくない

窓を開けて空を見よう

なんてことだと僕は思った

赤いアドバルーンが風もないのに

ゆらゆら揺れている

真っ赤なアドバルーン

あっちこっちに空いた穴から

思い切り空気が抜けて

その反動で揺れているのだった

そのうち本格的に割れそうだ

無理に膨らましたアドバルーンは

詰め込むだけ詰め込んだ空気に

行き場がなくなつて

それでも虚勢と都合で無理やり詰め込んで

裂け目という裂け目から漏れ出している

こんなにしてまで上げている

アドバルーンにはいったい

どんな文言がと思つてみると

何だか勇ましくて耳心地の良い

それでいて意味の無い文章が並ぶ

飛んでいる穴の空いた

アドバルーンを落とすまいと

まだ空気を送り込む

無茶に無理を重ねている

一回降ろしたら済む話なのに

そのうちなのだろう

すっかり穴が大きくなり

まるで大きなぼろ布のような

アドバルーンが僕らの頭上に落ちてきて

すっかり辺りを暗くするだろう

ため息が虚空に浮かぶ

空っぽになった自分の腹を

心配になって摩つてみた

嫌な手触りがしてくる

どうやらそのうち自分にも穴が空きそうだ